

関東大地震後の飲料水不足が契機となった 足柄上地区の簡易水道の敷設

平野富雄¹

1 はじめに

神奈川県西部の南足柄市、山北町、開成町、松田町、大井町及び中井町の一市五町が足柄上地区である。これまでに、足柄上地区内の南足柄市と山北町の地震の記念碑については、ほぼ紹介を終えている。

その後も引き続き残る四町の記念碑の調査を進めているが、それぞれの町内に建っている碑の数はそう多くない。しかも、それらの碑文が、これまでの南足柄市や山北町の碑文と比べてかなり異なっているのが興味深い。地震による、それぞれの地域の被害の違いが、石碑に明瞭に記録されているのである。

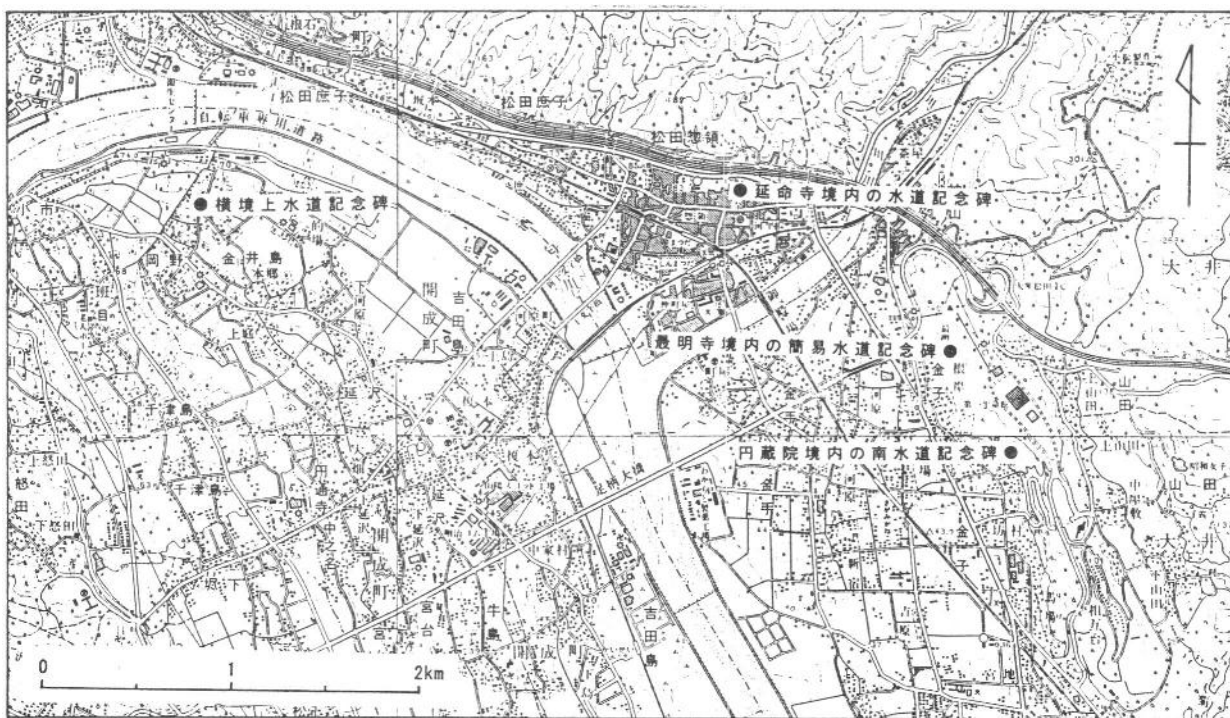


図1 足柄上地区の大井町、松田町、開成町に建っている地震と飲料水に関する記念碑の位置

¹ (元) 神奈川県温泉地学研究所 小田原市入生田 586 〒250-0031

(現) 南足柄市役所水資源政策課 南足柄市関本 440 〒250-0105

神奈川県温泉地学研究所観測日より、通巻第 47 号、 47-54. 1997

開成町や松田町、大井町の古くからの集落は、酒匂川と川音川による複合扇状地に形成された自然堤防の上と、足柄平野の東側の大磯丘陵沿いに発達した。これらの町の記念碑は大きく二つに分けられる。その一つは農業用水に関する物で、複合扇状地の集落に建っている多くの記念碑がこの類である。他の一つは飲料水に関する物で、大磯丘陵沿いなどに建っている。

そこでまず今回は、大井町、松田町それに開成町で見られる、地震と飲料水に関する記念碑を取り上げることにした(図1)。

この地域の古くからの集落には、その背後に急傾斜地がほとんど無い。そのため、たとえそこで地震による小規模な地すべりが起きても、歿死者供養碑を建てるほど大規模な被害は生じなかったに違いない。このように、町内に建っている地震の記念碑を調べてみると、それらの碑文によって、その地域の地震災害の性質をある程度知ることが出来る。それは取りも直さず、後世の人々への無言の教えになっている。

2 大井町金子・最明寺境内の簡易水道記念碑

東名高速道路の大井松田インターチェンジに近い大井町金子宇根岸に、鎌倉幕府と大変ゆかりの深い真言宗最明寺がある。相模善光寺とも呼ばれるこの寺の開創は鎌倉時代で、当初は松田山の山上に建てられた。今ではその跡が、最明寺史跡公園として整備されている。

我が国第一級の活断層として知られる国府津－松田断層が、JR国府津駅付近から御殿場線の東側を北西－南東方向に連なる大磯丘陵に沿って走っている。現在の最明寺はこの大磯丘陵の北端に位置し、本堂や庫裏は丘陵の斜面に沿うようになっている。

国道255号線からスーパー・ヤオマサがある金子交差点で丘陵側の脇道に入ると用水路が流れている。用水路に沿って北に向かうと最明寺の門前である。長い参道を進むと高い石段に突き当たる。石段の左手には弘法大師像や平安観音像が建っている。石段を登ると、正面は大きな本堂である。この本堂の右手には、丘陵の斜面から流れ出た湧水が沢を刻んでいる。金田簡易水道の記念碑は、その沢の右岸に建っている(写真1)。

大井町金子地区には、かつて数多くの共同井戸が存在した。町営水道の普及によって、それらの使命を終え、地域の人々からも忘れられだしている。すでに、それらの多くが地域の開発などによって、井戸そのものも整理されだし、姿を消したものもある。

今から15年前の1982(昭和57)年に、金子地区の共同井戸の調査

が地元の県立足柄高等学校の郷土研究部によって行われた。

すでに、この地域の開発はかなり進んでいたとはいえ、郷土研究部顧問の瀬戸貞夫教諭を中心にした当時の共同井戸の調査は、今では貴重な記録となっている。

この調査の特徴の一つは、民俗学的調査手法が取り入れられた



写真1 大井町金子・最明寺境内の簡易水道記念碑(左側)

最明寺境内の簡易水道記念碑

記念碑

権大僧正高木快雅師家額

大正十二年九月震災激甚当村家屋多倒潰泉井亦崩壊居民困用水
欠乏於是有志胥謀欲挾最明寺境内湧水敷設簡易水道申請県知事
而起工十五年九月取入口及貯水池竣工明治節行通水式水道者利
用道路地下設幹枝線配給各戸其区域及根岸市場河原昭和二年六
月延長于金手組合総戸数百三十一別供給役場学校等水量尚有剩
旱時無窮渴之慮而其經費組合員釀金一万八百余円牧野工場出金
二千五百円県補助金二千五百二十三円村負担金千八百八十円合計金
一万五千五百余円即以金一万四千六百三十余円支弁工費以金二千
二百円充維持基金其殘額為予備金工事完整水質拾良衛生上毫無
懸念他日有加盟者給水綽有余裕且設消火栓于要所期居民生開之
安定公益不鮮少洵為美萃矣仰觀如意山高數百尋松杉蔚蔚成林洞
中祀弁財天澗徑尽處聽水声涼々開山淨蓮上人勤行弘濟之德与道
崇儉素守成之藏久銘人心則水道之利沢亦可以惠後昆者大也頃日
將建碑令予作文仍叙其較略云

昭和十四年仲春日

不息

長坂邨太郎撰並書

ことで、共同井戸に関する聞き取り調査が精力的に実施された（郷土研究報告、第2集、県立足柄高等学校郷土研究部、1983）。

金田簡易水道記念碑が建っている根岸上地区は、関東大地震が起きた当時は52～53戸程であった。地震による地すべりで3戸が埋まってしまった。このことがあったので、大磯丘陵の崖寄りの家は、それより西側に移り住んだという。

地震の前までは、丘陵から流れ出る沢水が主に生活用水として用いられていた。石積みの井孔を持つ家は少なく、それらも地震で埋まってしまった。地震のあとの1箇月ほどは飲み水に困り、隣の松田町神山の湧水を利用したということである。

このような状況の中から、金田簡易水道敷設が計画され、実施に移されたのである。

1923(大正12)年の関東大地震で井泉が崩壊し、用水が欠乏した。そこで、善最倉蔵、間宮恒氏らが発起人となって金田水道組合をつくり、ここを水源として、貯水池の築造、配管工事が行わ

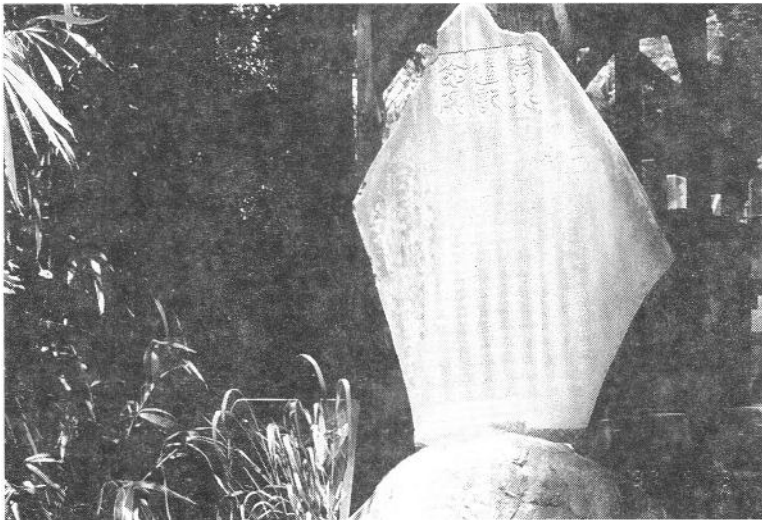


写真2 大井町金子・円蔵院境内の南水道記念碑

円蔵院境内の南水道記念碑

南水道記念碑

人生一日も缺くべからざるは飲料の水
なり當部落従来各戸に井泉ありしが震
災後水量減ぜし故簡易水道敷設乃議起
り偶坪井氏山林中に拾良の水源あるを
発見し年額拾圓の借地料を納れ同所に
堅牢なる貯水槽を設くる乃約成り昭和
五年三月一日起工式を擧げ四月六日通
水式を行ひ工費金五百六十二圓給水戸
數十有七にして水量尚餘剩あり衛生上
最緊要なる施設として其澤蔚を子孫に
潤ふ寔に賞讃すべき事なり今茲建碑に
際し予に文を需む仍にその大略を記す
昭和十一年五月 不息 長坂邨太郎

れた。1926(大正 15)年には根岸、市場などの各戸に給水が始まった。その後、1927(昭和 2)年には金手方面まで延長工事が行われたということである。

当時は、チフスや赤痢などの伝染病対策が衛生の面からの最重要課題であった。蛇口から水が出る便利さに驚き、水道敷設の喜びが記されている。

3 大井町金子・ 円蔵院境内の南 水道記念碑

円蔵院は、最明寺の山門入口からその前を流れる用水に沿って約 650m 南に下った左手に位置し、丘陵のきわに境内が広がる。

この寺の墓地の一角に南水道記念碑が建っている(写真 2)。

碑文の冒頭から「人生一日も缺くべからざるは飲料の水なり當部落従来各戸に井泉ありしが震災後水量減ぜし故——」と、関東大地震後の飲料水の欠乏のほどが、今でも私たちに伝わってくるようである。結局、地震後の飲料水の欠乏が引き金となって、ここではわずか 17 戸の人々により、簡易水道の敷設が始まった。

今ではこの地域も町営水道に切り換えられ、簡易水道の使命は終わったが、かつて水源地として用いられた湧水は、今でも沢を刻んで流れ出ている。

4 松田町総領・ 延命寺境内の水 道記念碑

小田急線の新松田駅から、町の北側に東西に連なる松田山の方に向かって約 5 分歩くと曹洞宗延命寺に着く。その山門の手前に大きな水道記念碑が建っている(写真 3)。

この記念碑のことは、すでに「観測だより、第 2 号(神奈川温泉地学研究所報告、第 9 巻、第 2 号、1977)」で一度紹介した。

しかし、前回は紙面の関係で碑文の全てを掲載することが出来



写真 3 松田町総領・延命寺境内の水道記念碑

延命寺境内の水道記念碑

水道記念碑

神奈川県知事從四位勲三等石田馨題額

大正十二年九月一日関東大地震二續テ数回二瓦ル余震ノ為本町被害激甚ヲ極メ町民多ク飲料水ノ涸渴ニ苦シム就中延命寺沢及中沢付近ヲ中心トセル居民最モ甚ダシク其ノ急ヲ免レムトシテ簡易水道敷設ヲ企テ延命寺沢湧水引用上ニ派ヲ生ジ事態收拾ス可ラス町長鍵和田修平氏深ク之ヲ憂ヒ居中調停右湧水ヲ取入レ字張間田上ニ貯水池ヲ設ケ東箒場橋西沢南川音川ヲ区域トスル町営水道ヲ計画シ委員鍵和田福蔵鍵和田忠造石井久光永山治四郎石川正司持田作蔵ノ六名ヲ擧ゲ工費金二万八千七百六十五円ヲ計上シ関係各機関ニ諮リ其ノ賛同ヲ得テ同十三年六月二十八日起工十月一日竣工セシモ其後給水希望者続出ノ為金五千八百四十三円ヲ投ジテ拡張工事ヲ施シ以テ其ノ足ラザルヲ補ヒキ然ルニ昭和二年四月小田原急行鉄道ノ開通ト共ニ来住者激増シ為ニ多量ノ用水ヲ需ムルコト頗ル切ナリ於是新ニ枇杷沢湧水ヲモ引用シテ従来ノ給水区域ヲ字神山以西定光沢以東字町屋以西一円ニ延長ス此工費金三万四千四百五十五円同年十一月三日ノ佳辰ニ着工翌三年五月一日竣工ス創設ヨリ完成ニ至ル実ニ四箇年工費総額金六万五千七百五十三円ニシテ第一貯水池積三十坪貯水量千六百六十三石第二貯水池積八十八坪貯水量四千石ナリ現在六百六十五戸ニ均霑シ尚希望者ノ需ニ応ズルヲ得ベシ願ミルニ常時ノ町当局議員並委員ノ努力寔ニ多トスベク茲ニ記念碑建設ニ当リ梗概ヲ叙シテ後代ニ伝フ

松田町長 中村 梧六撰

不 息 長坂 邨太郎書

昭和十年五月

なかった。そこで今回、足柄上地区における関東大地震と飲料水に関する記念碑を紹介する機会に、碑文の全てを掲載する。

大井町の場合と同じように、その後、松田町も水源井戸を掘削して、簡易水道は町営水道に切り替えられた。そのため、関東大地震後に、町内の簡易水道の水源となった沢水は利用されないままになっていた。

以前、私は、延命寺で催された法事の席で当時の松田町長の平野興二氏と会ったさい、門前の水道記念碑の碑文を読んでほしいと話したことがある。その進言が効いたためかどうかは定かでないが、その後、松田町では、かつて関東大地震後に簡易水道に用いた水源から役場の敷地に沢水を引き入れ、災害非常用水として使うようにしたということである。

5 開成町金井島の横境上水道記念碑

足柄平野の扇頂部に町域が広がる開成町は、かつては共同井戸の町と呼んでも良いほど多くの共同井戸が飲料水として用いられていた（写真4）。

開成町史・自然編で「地下水」を担当した神奈川県温泉地学研究所の横山尚秀氏は、その冒頭で次のように開成町の水事情について記している。「『開成町史研究』2号に瀬戸貞夫氏が述べているように、開成町延沢から金井島にかけては地下水位が深いため生活用水を得る井戸を掘ることが困難であり、長い間酒匂川から引水した用水路の水を利用して（瀬戸貞夫「開成町の共同井戸」、『開成町史研究』2号、1988）。しかし、度重なるコレラの流行があり水利用の便をはかるため、明治初期から多くの共同井戸が掘さくされるようになり、さらに、関東大地震後の飲料水確保のため井戸数が増えた。――」（横山尚秀、開成町史、自然編、第2章 地質と地下水、1994）」。

このような開成町の水事情そのものが、金井島地区の横境の路傍に建っている石碑にハッキリと刻まれている（写真5）。

開成町金井島地区には、その南側に開園して10年になる水田の畦に植えられた「あじさい公園」が広がり、人々に親しまれている。この地域は、かつては酒田村と呼ばれたことでも分かる通り、優れた酒米が稔る水田地帯として知られている。地表の水の豊かさとは裏腹に、地下水位が深いので飲料水事情は決して良くない地域である。

ここも、町営水道の敷設によって、今では水事情も改善されている。しかし、事ここに至るまでには、この地域の人々の苦労と努力があったことを石碑は伝えている。



写真4 開成町金井島に今でも残っている共同井戸



写真5 開成町金井島の横境上水道記念碑

横境上水道記念碑

横境上水道記念碑

酒匂川の清流に恵まれ山紫水明を誇る我が横境は用水豊富なれども地下水著しく低く鑿井極めて困難のため飲料水不自由にして明治初年に掘られた此の共同井戸が唯一の水源なり 遇々大正十二年九月一日の関東大地震の折地下水の沈下を来たし井水枯渴せり 依つて部落民相計りこれが掘下げ工事を行い清水を豊富に湧出するに至る

昭和二十年八月第二次大戦直後国内衛生状態の悪化に伴い傳染病各地に猖獗し我が部落も亦赤痢の惨禍を見るに至る この時吾等一致團結して上水道設置を画し終戦直後の惨材不足その他の困難を克服し昭和二十三年七月終にこの事業を完遂す

爾来経ること五ヶ年唯一人の傳染病患者の発生をも見ず 水汲み運搬の劳苦より開放せられその恩恵に浴すること大なり 茲に感謝のため之を建つ

昭和二十八年七月 醫學博士 蔚藤正治撰